おじさんズ通信

２０２２年１月号（Ｎｏ１４）
発行元：登別市新生町４丁目桃柿通
緑風舎
発行者：おじさんズ３号

継ぎ当てしたら、ミャンマーが現れた

薄くて軽くあったかく、かつ安価なダウンジャケットの２着目にも、かぎ裂きの損傷を与えてしまった。１着目はヘソとその下辺りに２カ所、２着目は左袖の肘辺り。さすがに３着目の買い足しには、山の神のツノが鋭く伸びて「待った」をかけている。似たようなダメおやじはいるだろうと、インターネットでパッチはないか調べてみると、結構な種類がある。値段も数百円から。ネット購入を考えてから、ふと、ひらめいた。「パッチはここにあるじゃないか！」

そう、チャックを引けば外れる帽子サマに、人身御供になってもらった。なに、もう片方の帽子もあるし、無きゃ無いでいい。これぞ、我が家のSDGｓかと思ったが、ちょっと違うみたい。しかし、「継ぎを当てる」なる言葉と行為が、なんとも懐かしい。ちょっと「方丈記」の鴨長明になった気分。

吝嗇（りんしょく）、六日知らず（※）、赤西屋ケチ平などと笑うなかれ。年金生活者にとって明日を生きぬく知恵なのだ。というわけで、ミシン目で仕切られた一角にナイフを入れ、パッチをつくり、両面テープをふちの四方に張って、傷口にペッタンコ。光の加減にもよるが、ぱっと見では、どこが継ぎ当てした個所か、分かるかな～？

この綿花は、ひょっとして？

犠牲になった帽子の切り抜いた一画からフワフワ綿を取り除いていて、ハッとした。

ひょっとして、この綿花はあの中国新疆ウイグル自治区で栽培されたものじゃないか？　とすると、間接的にウイグル族の人々への人権弾圧に、この輸入品を通じて手を貸しているのではないか、と暗い気持ちになった。早速、裏の布地を広げて、タグを探すと２着とも「ミャンマー製」とある。これまた、軍事政権が民主主義などどこ吹く風と、デモの市民を容赦なく殺す冷血国家の産物だった。

北海道の片田舎に住む一老人として、アジアの人権弾圧に対してなにが出来るわけでもないが、継ぎ当てジャケットを着るたびに、「負けるな、いつか夜は明ける」と念じている。（※の説明は、「薫風烈風」で）

なんとなくキネマ特集

壱　映画フィルムの謎

右の映画フィルムは菅原文太主演の東映映画トラック野郎シリーズの最終作「トラック野郎故郷特急便」（昭和５４年暮れ公開）の始まり部分。登別映像機材博物館から頂戴してきたものだが、「題名」の次にくる「トラック野」の文字が、どういう訳か反転しているのに、お気づきだろうか。

映画フィルムの頭出し部分には、こんな仕掛けをするものかと思ったが、念のために館長のBIN山本氏に聴いてみたら、「編集作業をした人がいい加減だったか、分かればいいと裏表を逆に張り付けたか。よく分からん」との回答。業界人でも首を傾げるこの代物、遊び心でやったのだろうーとにらんだが、さて真相は

いかに？　もしかして、鑑定団に出したら高値がつくかも。

弐　ゾルバ・ダンス

YouTubeで久しぶりにフラッシュモブ（flash mob）を見ていたら、カナダのオタワで開かれた「ギリシャ・フェスティバル」の動画に心引かれた。広場に伝統楽器ブズーキの音色が響くと、中年男性が何か曲をリクエストし、これも伝統舞踊らしい踊りを始めた。その曲、皆さんも一度はどこかで耳にしたことがあるはずだ。

そう、映画「その男ゾルバ」（１９６４年英・ギリシャ・米国合作）で、主演のアンソニー・クインがラストシーンで若者に教えるゾルバ・ダンスのメロディーだ。

広場の男性の周りに一人、また一人と老若男女が集まり始め、隣人の肩に手をかけて踊りの

輪を広げていく。その大きな輪が二つ、三つと出来上

がっていくから、これまた壮観なこと。

昨年来から自身に問うている「豊かな人生とは」の一部はこれかな、と思った。見ず知らずの人間同士が、ひとつの曲に合わせ、お国の伝統的な踊りに興じる。いや、踊っている人々は国もさまざまな、万国旗状態だったのかもしれない。

日本にも盆踊りやフォークダンスはあるが、フラッシュモブのそれとは、どこか違うような気がする。あえて似たケースを探せば、三線（さんしん）の音が響くと踊り出す沖縄県人気質がそれかもしれない。

踊りが半ばに差し掛かると、店の男性が大量の皿を楽団の前に運びこみ、必死の形相で猛スピードで割り出したのには驚きだった。これまた、ギリシャ人の伝統的なストレス解消法とか。

参　映画チケットの半券

昨年１０月から約半月間、登別市立図書館で「映画半券チケットコレクション展」が開かれた。といっても、当方はあいにく見逃した組で、図書館通信１月号で、その記事を見つけた。

これは、どこか気脈が通じるぞ、というわけで、図書館を通じて半券の展示に協力された所有者に連絡をとってもらうと、近く会いましょうとの返事あり。新たな出会いが、ひとつ生まれそうな、うれしい気分になる。

「おじさんズ」のホームページでも紹介しているが、身内から「これ、あげる」と譲渡された昭和３７年（１９６２）から平成２年（１９９０）までの室蘭の映画館の入場半券やデザインチケットなど２３０枚余りある。**（一部左段下の写真）**

「本は市塵に返せ」（石川淳）ではないが、できれば懐かしい入場半券も、多くの目に触れる場所や機会をつくりたい。「求む！　同志」の行脚が続く１年になるかな。

なんか、問題でも？
2021/12/29

あれ、甘くなってるぞ
2022/1/7

桃柿通りの四季

薫風　烈風

▶遅まきながら、明けましておめでとうございます。本年も、「おじさんズ通信」発行、がんばります。まずは、渋柿をりんごと一緒にビニール袋に入れて甘くする実験報告ですが、４週間で皮が薄くなり、中身も甘～くなりました。もっとも、鳥の餌に残した枝の柿も、一定の時期が過ぎると甘くなることが判明。しかし、シバレがやってくるとベチャベチャになり、食用には不可、難しいものです。

▶樽柿と思っていた庭の樹は太郎柿でした。今冬もヒヨドリのつがいやら独身がやってきては、柿の実をついばんでいます。同時に１日１回はやって来て樹上で柿を取ろうとパンチしているのが、２匹の野良ネコ。食べるつもりはないようで、お遊びのようです。

▶※の「六日知らず」ですが、落語通なら「片棒」でおなじみ。ケチの呼び名のひとつで、普通、日にちを指で数えると、「一日、二日、三日」と順に指を折っていくのですが、「六日」になると折った小指を開かなければならない。一度握ったものは、絶対離すものか、と五日目どまりで先に進まないから「六日知らず」という訳なのですが、お分かりでしょうか。この「片棒」結構面白く、噺家は古今亭菊之丞などＰがよろしいようで。

▶正月ボケか、さて今月号のネタは？　とあれこれ思案していましたが、題材はあるものです。そしてあと３カ月で今冬を乗り切れそう。来る春を楽しみに、皆さま、お元気で～。